

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990300071		
法人名	社会福祉法人 星風会		
事業所名	星風会グループホームこすもすおおひら		
所在地	栃木県栃木市大平町富田5-225		
自己評価作成日	令和4年10月24日	評価結果市町村受理日	令和5年1月30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

食の満足度を向上するために、月2回、クックチルの食事を止めて こすもす食堂を実施しています。こすもす食堂では、材料をスーパーへ買いに行き、職員と入居者が一緒に考えた献立を提供するようにしています。季節の食材や、地元ご飯が提供できるようにしています。また、月に1回はおやつの手作りをしています。入居者様と一緒に作れるようなものを考えて実施しています。介護するだけでなく、一人一人のできることが継続できるように、一緒に作業をしたりおしゃべりしたりしながら、笑顔で楽しく生活ができるような支援を心がけています。

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は、平成23年6月に東武日光線新大平駅から徒歩7分の利便性の良い市街地に開設された2ユニット18名定員の事業所である。建物は、南向きで明るく広い共有空間に機能的にソファーやテーブル、キッチン等が配置されるとともに、居室は全て落ち着いた和室となっている。法人が認証を取得したISO9001の品質方針「お客様満足度を高め、地域貢献を目指す」ことを踏まえ、「皆さんがずっとここに住みたいと思えるサービスの提供」という事業所理念を職員全員で策定した。この理念の実現のため、外出支援やレクリエーション実施回数等具体的な数値目標を定め積極的に利用者の健康促進策に取り組んでいる。また、同法人が運営する医療機関から月2回の訪問診療と毎週訪問看護があるなど医療との連携が図られており、利用者は安心して日常生活を送ることができている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会		
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6		
訪問調査日	令和4年11月17日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	交流スペースに掲示したり、職員会議や内部研修を利用して理念の共有をしている。また、実践につなげられるよう、品質目標を立て達成できるように努めている。	理念を事務室・交流スペースに掲示するとともに職員会議等でふり返り共有化を図っている。実践は、具体的施策項目を定め、散歩・外気浴参加等外出支援やカラオケ利用の促進等、利用者の健康維持活動を積極的に支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の商店やコンビニエンスストアなどで買い物支援をしたり、近所の公園を散歩したりしているが、コロナ禍により頻度的にはかなり少なくなっている。 ボランティア、地域の保育園や小中学校との交流もコロナ禍によりできなくなってしまった。	コロナ禍により、利用者と地域との交流ができなくなっている。事業所周辺の散歩時や直売所等への買い物時に挨拶する程度である。傾聴ボランティアとは連絡があったり、はがきでの便りがきたりしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入居者だけでなく、見学に来た方や入居申し込みに来られた方、電話での問い合わせの方に対して、認知症の人への理解や支援方法をアドバイスしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍により、運営推進会議の開催は紙上開催となっている。今年度の試みとして、オレンジカフェ開催後に特養と合同で会議を開催している。	運営推進会議は書面開催とし、議事録やこすもすおおひらだよりを関係者に送付している。9月には同法人の特別養護老人ホームと合同で対面での会議を行ったが、民生委員や交番の所長など一部の委員の参加に限られた。	委員から幅広い意見を頂くなど双方向的な会議となるような工夫とともに、地域との交流を広げるためにも自治会関係者の参加について働きかけることを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	不明なことが発生した場合には、積極的に相談し協力していただいている。最近では、コロナ関係や補助金関係の申請についてなど、不安な時にはすぐに相談している。	市の担当者とは、事業所への連絡・通知や報告等について、分からないことがあれば、その都度連絡をとり、助言を得るなどしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年に1回以上は、身体拘束廃止委員会を中心に身体拘束についての内部研修を行い職員全員が理解できるように努めている。玄関等の施錠は、夜間のみで、自由に外へ出ることができる環境となっている。物理的な身体拘束だけでなく、スピーチロックについても力を入れている。	身体拘束廃止委員会や内部研修を通して、職員は拘束の無い介護支援に努めている。自己チェックとして、虐待の目チェックシート等を活用し、具体的に気付きと対処方法等を話し合っている。帰宅願望など不穏時には落ち着くまで一緒に散歩するなどしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に1回以上は、虐待防止委員会を中心に内部研修で高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を設け、虐待を見過ごさないよう、通報義務についても理解を求めている。		

星風会グループホーム こすもすおおひら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年に1回は、権利擁護について学ぶ機会を設けている。現在は、後見制度を利用している入居者はいないが、入居申し込みの方などに、利用についてアドバイスすることがある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、十分な説明を行い理解・納得していただけるように努めている。1つの項目ごとに、理解できているか確認をしながら説明をしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	普段の電話や面会時にもご要望を伺うようにしているが、1年に1回はご家族にアンケートを行い、意見や要望を伺っている。施設内にはご意見箱も設置している。	年に1回アンケートを利用者・家族に実施して意見要望等を把握している。また、家族への電話連絡時や来所時にも伺っている。利用者の要望等については日常の支援業務の中で把握し、可能なものは反映するよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議やユニット会議はもちろん、普段から、職員の意見や提案を聞くように心がけている。その都度、必要であることは積極的に反映できるよう努めている。	年に1回職員面談を行い、個人の思いや意見要望等を聞いている。また、月1回の職員会議、ユニット会議でも改善等の話し合いを行っている。休憩時間の確保や備品の購入など可能な限り反映するよう努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員が向上心を持って働けるよう、法人として職場環境・労働条件等の整備に努めている。コロナ禍でも安心して働けるよう、感染予防対策も統一して行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内外の研修を受ける機会は確保されている。未経験の人材を積極的に採用し、働きながらトレーニングを行っている。各種奨学金を設け、働きながらスキルアップできるよう支援している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍のため頻度的には少ないが、地域の会議や外部での研修に参加することで、同業者と交流が持てている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居申し込み時から、できる限り本人との会話を持つように心がけている。本人の困りごとや不安な気持ち、どう暮らしていきたいのかなどを、会話の中から見つけられるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込みの時から、家族が困っていることや不安なこと、入居する家族にどう暮らしてほしいのかなどをお聞きして、施設でできることできないこと等を含めたくさん会話をするようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	申込に来られた段階で、現在の状況をよく確認し、必要な支援、受けられる支援を提案できるように努めている。入居してからは、本人に必要な支援を見極められるように職員間の情報共有を大切にしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、一方的に介護をするのではなく、生活を共にする意識をもって、一緒に作業をするなどしている。何かをしていただいたときには、感謝の気持ちを伝えるよう心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍により、面会や外出に制限はあるが、家族に協力をしていただいている。入居者に対して家族でなければ与えられない安心感があることをお伝えし協力していただいている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で制限はあるが、家族・親戚・兄弟姉妹・友人と面会ができるように支援している。コロナが落ち着いたら、入居者の行きたいところへ積極的に出掛けたい。	コロナ禍のため、知人、友人等の訪問が無く外出制限もあるため、馴染みの人や場との関係継続は厳しくなっている。事業所の電話を使ったり、利用者自身の携帯電話で連絡をとりあうなどの支援をしている。どうしても外出が必要な場合はその都度判断している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日頃の生活の様子を記録や申し送り等で情報共有し、入居者同士の関係性を把握している。おしゃべりができるように調整したり、できないところを手伝っていただいたりしながら、互いにかかわりあえるような支援を心がけている。		

星風会グループホーム こすもすおおひら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設へ移動されても、スムーズに生活ができるよう必要に応じてフォローさせていただいている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	お話ができる方の場合、普段の会話の中から希望や意向を把握できるよう努めている。お話が難しい方の場合、支援中の表情や反応、家族からの情報等をもとに本人本位に検討するよう努めている。	日常の支援業務の中で、利用者の本音を把握できるようにしている。訴えが難しい利用者は、本人の表情や仕草から汲み取るとともに、職員間で話し合い本人本位で検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の調査で情報を把握できるように努めている。入居されてからは、ご本人のお話される内容や家族への確認などから、支援に必要ないろいろな情報を把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	支援記録や業務日誌等を書くことで、その時々的心身状態、有する力等を確認し、全職員が情報共有できるようにしている。また、月に1回、ユニット会議において、入居者の状態を確認し、支援方法の確認を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	普段から職員間で情報を共有し検討している。必要時には家族へ報告相談をしている。訪問看護や訪問診療においても報告相談をしてアドバイスをいただき介護計画に反映できるよう努めている。	家族等の意向は、来所時や電話連絡時に伺っている。ユニット会議でADL表を基に話し合い、モニタリングやアセスメント結果、医師や看護師の意見も踏まえて、介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	支援記録には、実際に行ったこととその反応や、いつもと違うことがあったら小さなことでも記入するようにしている。記録には常に目を通して、情報を共有し、タイムリーな支援ができるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	帰宅願望があって出かけていく方とは、気が済むまで一緒に歩いてくると、施設の中に縛りつけない支援を心がけている。 コロナ禍で、現在はできていないが、家族が居室に宿泊することも可能。		

星風会グループホーム こすもすおおひら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入居前の生活で本人を支えていた地域資源を把握するように努めている。入居してもつながりが持てるような支援を心がけている。現在はコロナ禍もあり難しい点もある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は、家族と本人の希望を優先し、適切な医療を受けられるように支援している。外部医療機関を受診するときは、必要に応じて経過報告の書類を作成したり、立ち合いを行っている。	利用者は、1名を除いて同法人が運営する医療機関の医師の訪問診療を月2回受けている。また、全員が訪問看護を受けており、健康管理がされている。家族、医療機関との情報も共有されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護を受ける際には、その日の体調だけではなく、1週間の状態を報告・相談し適切な受診ができるように努めている。入居者の体調変化があった時には、随時報告し相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	星風会では、法人としてTMCLもつが・TMCとちの木等と連携をとっていて、入院した際には、週に1度経過報告が送られてくる。報告を見ながら、病院側と連絡を取り合い、退院後速やかにこすもすの生活に戻れるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期の在り方については、契約時に説明を行っている。医師から話があった時には、速やかに家族に伝え、話し合いをしている。家族の意向を確認しながら、方針を共有し支援できるように努めている。	入居時に、利用者・家族等に説明し書面により確認している。看取り指針を作成しており、実施する場合は、本人・家族等と事業所で十分話し合いをして、主治医や看護師と連携し家族等の意向に沿った支援をしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応や事故発生時の対応については、内部研修などを利用して資料で確認を行っている。応急手当や初期対応の定期的訓練は不足しているため職員間で力の差がある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は毎月行っており、総合避難訓練は年に2回実施している。(夜間想定も実施) 地域との協力体制については、取り決め等はないが、火災の誤発報があった時には北側の施設に避難させていただいたこともある。	年2回、夜間想定も含め、法定の総合避難訓練を実施している。職員の提案により、毎月自主的な避難訓練も実施している。隣接の介護施設には、利用者避難時の協力をお願いできる関係にある。	

星風会グループホーム こすもすおおひら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	接遇の研修を定期的に行い言葉かけの大切さを確認している。トイレの介助時や、居室での対応時はドアを開める。個人のお部屋のドアは開け放しにしない等常日頃から、お互いに注意するようにしている。	職員は、接遇研修等を通して、利用者の呼び方や言葉かけ等に注意している。また、プライバシーに配慮し、トイレ誘導や部屋の入室時の声掛けも適切に実施して、利用者の人格・尊厳を大切にしたいケアに取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員が決めつけることなく、本人の意向を確認しながら支援をするように努めている。入居者が自分の気持ちを伝えやすいように、日頃から入居者と積極的に会話するようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事の時間は決められているが、一緒に食べたくないときには時間をずらして提供している。その時々々の心身の状況に合わせて支援をするようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で衣類を選べる方には、自分で選んでいただいている。職員がお手伝いをすれば決められる方には、職員がついて決めていただくようにしている。その人のこだわりを否定することはないが、温度調節には気を付けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	現在の食事は温めるものが中心ですが、月2回のこすもす食堂では、入居者からの希望を伺って献立を決めている。片づけを一緒に行ったり、手作りおやつなどの簡単作業の時に手伝いしていただいたりしている。	食材は、外注業者に委託しており、ご飯と味噌汁、さらに1品は職員が作っている。月2回は、利用者の希望を取入れた手作りの食事を提供している。時には一緒におやつ作りをしたり、寿司や弁当等をテイクアウトすることもある。可能な利用者には、準備や後片付けをお願いしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が管理している食事を提供していて、食事量は、支援記録に毎食記録している。食べている様子を観察して本人にも状態確認をしながら、食形態の工夫などにつなげている。水分は随時飲めるような支援を心がけている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアの声掛けを行い誘導している。口腔ケアができていないが介入が難しい入居者については、入浴中に義歯洗浄液に浸すなど工夫している。入居者に合わせて介入の仕方を工夫している。		



星風会グループホーム こすもすおおひら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	できる限りトイレでの排泄ができるように支援している。便意がない方でも、服薬の調整とパターンの把握でできる限りトイレで排便できるように努めている。パットの交換等も自分でできることは続けられるような支援を心がけている。	排泄チェック表により、利用者毎の排泄パターンを把握し、利用者に合わせたトイレ誘導をしている。夜間も、出来るだけ誘導を行い本人の自立支援を促している。自宅等ではおむつを使用していた利用者がトイレでの排泄が可能となった方もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日、午前中に乳製品を提供している。便秘が原因での不穏など、職員間で情報を共有し、水分を多くとっていただいたり、軽運動を毎日行う等している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は1日おきに計画しているが、その日の気分で予定をずらすこともある。通院など外出の予定があるときには前日に入浴できるようにしている。入浴の湯加減は、ご本人の好みを伺いながらちょうどよい温度で入っていただいている。	基本的には1日おきの午後に入浴が出来るよう支援しているが、利用者の体調や気分に合わせ柔軟に対応している。入浴を拒否する利用者には、無理強いせず、翌日に変更するなどしている。月末の一週間は入浴剤を活用し、より楽しめるよう支援をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	寝具類は、ご自宅で使用していたものを持ってきていただくようにしている。日中、休息したい時には自由に休めるよう支援している。消灯時間は決まっていないので、それぞれが寝たい時間に入床している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の内容表は、支援記録のファイルに閉じてあり、いつでも確認ができる。服薬の確認は、服薬チェック表で行っている。薬の変更等があった時には、状態変化の記録を行うため、申し送りノート等を利用して周知している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	皆さんに家事参加をお願いしている。できることに合わせて、洗濯を干したりたんだり、掃除をしたり、食器を片付けたり。好む活動は人によって違うため、無理強いすることなく支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩へ行きたい時には、職員と一緒に歩くことができる。現在はコロナ禍のため、家族との外出は制限している。	コロナ禍のため、日常的な外出は制限されている。事業所周辺の散歩や庭に出ての外気浴で気分転換を図っている。散歩・外気浴は目標にも1日3人以上と定めており、毎月の実施状況を個別に管理して、健康維持に役立てている。	



星風会グループホーム こすもすおおひら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	時々、近くのコンビニエンスストアやパン屋さんへ出かけて、好きなものを購入し財布から支払えるよう支援している。手元にお金を持ちたい方には、家族の了承のもと財布に少額のお金を入れて自己管理していただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や友人に電話を掛けたい時には、事務所の電話を使ってかけることができる。携帯電話を持っている方は、自由にかげられる。手紙のやり取りについてもお手伝いすることはできるが、現在希望される方はいない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間は清潔を保ち、季節が感じられるような壁飾りを飾るなど工夫している。壁飾りは、入居者と作成するようにしている。温湿度計を見ながら、共有空間が過ごしやすいようにエアコン等の調整をしている。	共有空間のリビングや廊下等は、明るく広くゆったりして過ごしやすい空間となっている。リビングは、椅子やテーブル、キッチンが機能的に配置され、利用者とのコミュニケーションもスムーズにできる。壁面には、行事の写真や利用者で作成した貼り絵等が飾られている。温湿度も適切に管理されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールには、畳コーナー、3人掛けのソファがあり、自由に腰かけられる。一人で座っていたり、仲の良い方とおしゃべりしたりしている。南側のサッシのところには、椅子が置いてあり外の景色を見ながら日向ぼっこするなど自由に過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、自宅で使っていたものをなんでも持ち込むことができると説明している。家族と本人の意向に沿って家具等の配置をしている。	居室は6畳和室でクローゼット、洗面台、エアコン、カーテンが備え付けられている。利用者は家族等と相談して、自宅で使用していたソファやベット、使い慣れた家具、仏壇、思い出の写真等を自由に持込んで心地よく暮らせるようにしている。清掃も行き届いている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	お部屋がわからない方の場合、ドアに花をつけたり、名前のプレートを貼って自室が確認できるように工夫している。トイレ等にも必要時表示している。		